

プレゼンテーション力向上のための フィードバック支援システムの提案

園田成良[†] 吉田博哉[†]
神戸情報大学院大学 情報技術研究科[†]

1. はじめに

ビジネスや学業など様々な場面で機会を与えられるプレゼンテーションにおいて、発表を成功させるには、自身の考えを相手に伝えて十分に納得させる必要がある。しかし、資料作成や発表方法といったプレゼンテーション力が欠けていると、聴講者に考えが伝わらないため、これらの能力向上に日々尽力することが必要不可欠である。なお、プレゼンテーション力を向上させるためには、聴講者からフィードバックを得ることが望ましい。

ただし、聴講者の数が増え、フィードバックの分量が膨大となった場合、発表者は聴講者からの指摘を都度記録しなければならず、負担となる可能性が考えられる。それらの負担を軽減するため、西田ら[1]はフィードバック支援システムを開発している。一方、既存システムの場合、指摘内容が等価で扱われるため、聴講者が重要としたフィードバックを判断出来ない。また、現状のフィードバック方法では、1つのことを一度しか指摘しない為、優先的に閲覧すべきフィードバックが分からなくなる。

そこで本研究では、安間ら[2]の研究によって明らかとなった、プレゼンテーション終了後に発表者へ効果のあるフィードバックを返す仕組みを採用し、発表者がプレゼンテーション後にフィードバックのための指摘事項を受取ることができるシステムを提案する。また、聴講者から一番指摘の多いフィードバックをグラフで用いて可視化し、より効果的なフィードバックを目指す。

2. 本提案システムの概要

2.1. 本提案システムの全体像

本研究では、プレゼンテーション中に聴講者によって指摘した内容を効果的にフィードバック

するシステムを提案する。本提案システムの概要を図1に示す。

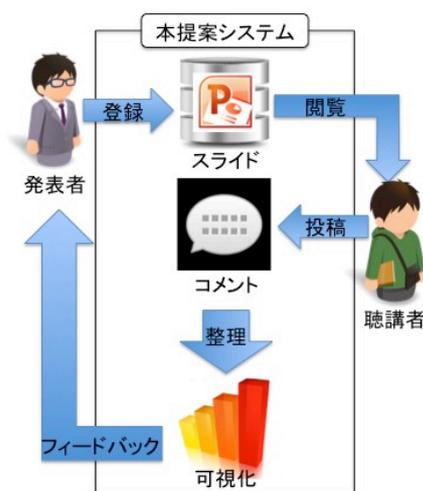


図1 本提案システムの概要

本提案システムでは、発表者が発表スライドを登録し、聴講者がそれらの資料を閲覧してコメントを投稿する。聴講者が投稿したコメントは、システムで整理し、可視化する。なお、コメントの可視化では、どの内容が発表者にとって重要であるかを明確にする。

2.2. 利用フロー

本提案システムの利用フローを図2に示す。

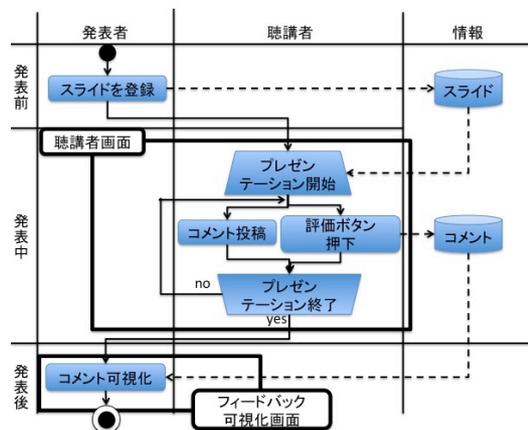


図2 本提案システムの利用フロー

Proposal of feedback support system for improving capability of presentation.

[†]Akira Sonoda

[†]Hiroya Yoshida

Kobe Institute of Computing([†])

図2で示す破線矢印は、情報の流れを示し、実線矢印は、利用の流れを示す。本提案システムでは、まず「発表前」フェーズにおいて、発表者がスライド情報を登録する。次に「発表中」フェーズにおいて、聴講者が発表タイトルを選択し、スライド情報を閲覧しつつ、発表を聴講する。その後、必要に応じてコメントを投稿する。投稿されたコメントは、データベースに蓄積され、フィードバック時に活用される。また、投稿されているコメントに、「そう思う」「思わない」の評価ボタンを設置し、適切なコメントであるかどうかを聴講者が判断の上、選択する。なお、プレゼンテーションが終了していなければ、何度もコメント投稿と評価ボタンの選択が可能である。最後に「発表後」フェーズにおいて、発表者は聴講者からのコメントを閲覧し、プレゼンテーションの改善に努める。

3. システム画面

3.1. 聴講者画面

「発表中」フェーズにおいて聴講者が利用する「聴講者画面」を図3に示す。

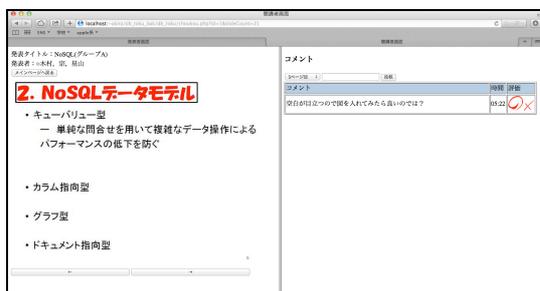


図3 聴講者画面

図3に示す通り、本画面はスライドフレーム（左）とコメントフレーム（右）で構成される。スライドフレームでは、発表スライドが表示されると共に、フレーム下部の「戻る」や「進む」ボタンを選択することで、前後のスライドを閲覧できる。次に、コメントフレームでは、コメントの投稿及び評価ができる。なお、コメントは、表示中のスライドに関連付けられるため、「戻る」「進む」ボタンで別スライドに切り替えるとコメントの一覧が切り替わる。また、他の聴講者が同様のコメントを指摘する場合は、設置している評価ボタンを押下し、既に投稿されているコメント内容を判断し評価ボタンを選択する。

3.2. フィードバック可視化画面

「発表後」フェーズにおいて発表者が利用す

る「フィードバック可視化画面」を図4に示す。

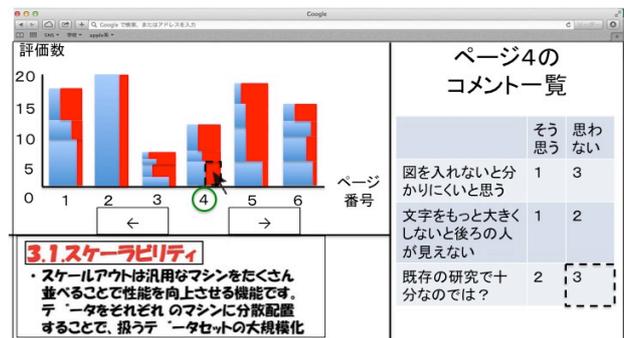


図4 フィードバック可視化画面

図4に示す通り、本画面は、可視化フレーム（左上）とスライドフレーム（左下）、コメントフレーム（右）で構成される。

可視化フレームでは、聴講者からのコメントの集計結果でグラフを描画する。横軸はページ番号、縦軸はコメントの評価数を表している。棒グラフの幅は、コメント毎の「そう思う」「思わない」といった評価の選択数を示し、「そう思う」の選択数が多い順に並び替えている。そのため、発表者は、棒グラフの高さや幅を確認することで、聴講者から指摘の多いフィードバック把握出来るため、より効果的なフィードバックが実現出来る。

4. まとめと今後の課題

本稿では、発表者にプレゼンテーション力を向上させる為のシステム提案を行った。本提案システムを利用することで、重要なフィードバックを明確化した。

一方、投稿されるコメントには、「プラス」「マイナス」のコメントに分類する事が出来る。それらをテキストマイニングで自動分類することで聴講者が評価しやすい仕組みを実現する。

参考文献

[1] 西田健志, 五十嵐健夫: Lock-on-Chat: 複数の話題に分散した会話を促進するチャットシステム, コンピュータソフトウェア/日本ソフトウェア科学会編, Vol. 23, No. 4, pp. 69-75, 2006.
 [2] 安間一雄: 学内 LAN 環境を活用したプレゼンテーション評価のフィードバック, 論文誌情報教育方法, Vol. 4, No. 1, pp. 28-30, 2001.